お父さんだからこその絵本

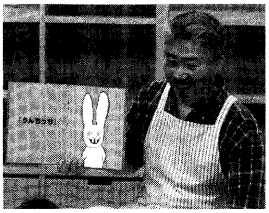
田中尚人

日ごろ、子どもと楽しむ絵本時間を習慣にしているパパ四人が集まって、「ほかの子どもたちに読んでみたら、どういう反応が返ってくるのかな」という単純な好奇心から始まったのが、「パパ'S絵本プロジェクト」の発端だ。

男性、それも現役育児中のパパが絵本の読み聞かせをするというのが当時珍しいことだったのか、各地の図書館や児童館、保育施設からお呼びがかかり、五年前の結成以来、月二回のペースで北は岩手県から西は四国や山口県まで、全国を楽しく回っている。月二回に限定したのは、家族と過ごす時間を最優先したいからではあるが、本音はそれ以上休日に外出をすると、ゴルフに忙しいパパみたいに、妻に愛想をつかされてはまずいからだ。

もともと、読み聞かせの勉強をしていない僕たちの読み方は、型破りで従来の正統派の読み方とは全く違うのか、行く先々で「そういう読み方をしてもいいんですね。何だか気が楽になりました」という感想をよく聞く。

「そういう読み方」とは、①子どもたちに行儀よく聞くことを強制しないどころか、読んでいる最中に返ってくる歓声や驚き、質問などを大歓迎している



パパ'S絵本プロジェクト
http://www.ehonnavi.net/ehon03_papa00.asp

こと。　②アドリブを入れたり、途中でページを閉じて子どもたちとするおしゃべりを楽しんでしまう。　③会場の子どもたちの反応に応じて、プログラムをどんどん変えるのが当たり前、ということ。

僕たちにとっての絵本とは、コミュニケーションのツールであって、一方的な読み方を押し付けたり、おとなしく絵本世界を受け取ってもらうことよりも、その絵本を通じて、「子どもたちとどれだけたくさんの生きた言葉のキャッチボールができるか」を、僕たちは一番大切にしている。絵本に入るための入り口は一つではなくて実はたくさんあるはずだし、昔と違ってゲームやテレビなど、子どもたちを中毒にする装置がこれだけ多い昨今、「絵本が大事」と説くよりも「絵本って、楽しいよね」と子どもに五感で感じてもらわなければ、空振りを繰り返すだけになってしまうはずだ。だから、僕たちは自分たちの活動を「読み聞かせ会」とは呼ばず、「お話し会」あるいは「絵本ライブ」と呼ぶことにしている。最近では、絵本に併せて楽器を演奏したり、お父さんやお母さん向けの講演も行うようになった。男性が読むということが当り前の世の中になるまで、この活動はもう少し続きそうだ。

お父さんとお母さんでは、子どもへのしかり方も褒め方も違う。遊び方も、勉強のさせ方も、見せたいテレビ番組だって全く違うわけで、その違いがあるからこそ、時には一方に逃げ場を求めたり、甘えてみたり、逆に厳しさに直面しそれを乗り越えることができる力を身につけていけるのではないだろうか。僕は、絵本も同じではないかと思っている。子どもに「善かれ」と願う母親や先生方に完全包囲されて、「よい絵本」と呼ばれる定番絵本ばかり押しつけられては誰だって肩がこる。ここは父親的な目線、つまり清濁併せもった視野の広さと遊び心、いたず

ら心、つまりばか心に満ちた絵本が加わることで、バランスが取れるのではないだろうか。栄養バランスの取れた食事はもちろん大事だけど、ロースカツや味の濃いラーメン、ヒーヒーしてしまうくらい辛いカレーのうまさも知らないようでは、たとえ健康になってもおもしろみがないのと同じ。

自宅の絵本棚は、ママが選んだ絵本しかなく、園でも、ばかばかしさでいっぱいのナンセンス絵本や、ちょっと下品だったり、残酷な昔話などはあまり読んでもらえない。「善かれ」と思うあまり、優しげな内容や結末を作り替えたものを与えようとするケースも目立つ。たとえば「猿蟹合戦」。最後に猿が臼につぶされるのではなく、猿が蟹に謝って、あろうことか仲良しになる、という絵本も出回っている。けんかしても、すぐに仲直りさせたがる大人の表面的な博愛主義で中途半端な介入をすることが、子ども同士の対人関係づくりを壊していることに気がついていない。

であれば、そういう絵本こそ父親的カテゴリーと呼べるかもしれない。つまり、ママや先生たちが選ばないような絵本、ということになる。男性だからこその、低くて粗野な声が活きる鬼、怪物、怪獣などが登場する怖い絵本、うんこやおしっこ、おならをテーマにしたビロウな絵本、意味不明だけど、なぜかおかしくて何度も笑いがこぼれるような絵本、極端なプロセスがあるからこそ切なさやむごさ、世の不条理さがいつまでも印象に残るような昔話や寓話などなど。自宅の本棚になければ、お父さんが買ってあげてみてはどうだろうか。

お父さんが絵本を読むという習慣は、子どもとお父さんのかけがえのない時間になるはずだし、お父さんの早い帰宅も促すから、育児一辺倒のママにも、やっと一区切りできるコーヒータイムをプレゼントできる。結果的に家族みんなの笑顔が増えるはずだ。

パパだからこその絵本セレクション

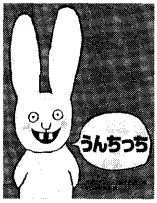
さて、そんなパパだからこその絵本で、僕が気に入っている絵本を紹介しよう。

（グランまま社編集長・パパ'S絵本プロジェクト・メンバー　NPO法人ファザーリング・ジャパン理事）

うんちっち

ステファニー・ブレイク作・絵
ふしみみさお訳　PHP研究所

タイトルのとおり、子どもにはバカ受けする必笑ナンセンス絵本。僕はこれをある幼稚園で読み、行儀のよい子どもたちを粉砕した経験あり。絵本は子どもの心を豊かにするために必要、と信じている方、試しに子どもに読んでみてください。



つきよのかいじゅう

長新太作　佼成出版社

ドキドキハラハラして待っていた結末は、とんでもないナンセンス。涙が出るほど笑えるけれど全く「ためにならない」絵本。

ねえ、どれがいい？

ジョン・バーニンガム作
まつかわまゆみ訳　評論社

何の役にも立たないけれど、抱腹絶倒の究極の選択肢が勢ぞろい。子どもたちのみずみずしい反応が、クセになる一冊。

三びきのやぎのやぎのがらがらどん

マーシャ・ブラウン絵
せたていじ訳　福音館書店

トロルの声は本気の怖い声で読んでほしい。結末が残酷だという人もいるけれど、これは生存を賭けたヤギとトロルの話。最後に仲良しになる、なんて平和主義は自然界には通用しない。

うんちしたのはだれよ！

ヴェルナー・ホルツヴァルト文
ヴォルフ・エールブルッフ絵
関口裕昭訳　偕成社

下品なタイトル？　だけど、これはうんこの科学をサスペンスの手法で描いた、多分「ためになる」絵本。